

ジェラルド・グローマー著「^{こぜ}瞽女うた」岩波新書、岩波書店 2014 年 5 月 20 日刊を読む

門付け唄を聴く—瞽女さが来らいた—

- 1.それほど昔ではなかった。春先になると越後の農村に芸人がやってきた。民家の玄関が開けられ、外から「ごめんなんしょう」という声が聞こえた。そして三味線の音がペンペンと鳴り響く。中から家人が出て軽く挨拶をした。すると、二、三人の女性が門前に立ち唄を歌いはじめる。
2. 視覚障害を持つ女性が道案内の手引きとともに、一年の大半僻地を巡り歩き、三味線伴奏の唄を歌った。^{こぜ}瞽女であった。中世の「御前」の転訛した語形である「ごぜ」は呼び捨てあるいは学術用語で、村人は「ごぜさん」「ごぜさ」「ごぜんぼ」などと呼んだ。
3. 「おお、来たか来たか。待っていたで」
「はあ、また来たがの。今夜泊めてくんなんしょ」
4. 紺のかすりの着物に一幅のくけ帯、腰巻と縞の前掛けをし、髪型は銀杏返しまたは髷を結った。旅中には通常菅笠よりも深く幅広の「丸笠」（別名「饅頭笠」「瞽女笠」）をかぶり、笠の下は手ぬぐいで頬かむり、手甲と脚絆を付け、草鞋を履いた。
5. 目的地に到着すると、瞽女はまず村の庄屋・旧家に赴き荷物を下ろし、三味線と米袋を持ち、二、三人一組で、村をひと廻りし、門々において短い唄を披露した。「さわぐ」あるいは「さわいで廻る」と越後瞽女が名付けたこの行為は、瞽女が来たことを村人に告げる役割を果たした。夜には宿で興行が催され、村人へのその広告の機能もあった。瞽女が泊まる宿の子供なども次々と近所へ走り嬉しい情報を触れ廻った。
6. 「瞽女さが泊まりに来raitたいの」
「そうか、そうせば夕飯に行かんばんな」
7. 瞽女が「さわぐ」ときには、地域と時代と場所によって変わる「門付け唄」を歌った。中越地方を広く巡業し、長岡系の瞽女の関根ヤスは、正月に「さわぐ」には「門付け唄」に加え、いくつかの段に分かれた長編で七五調を基本とする「^{さいもんまつざか}祭文松坂」の一部も利用したという。同じく長岡周辺に活躍した瞽女の榎本トラは、七七調の長い「^{ヒトコト}くどき」を「^{ヨコト}一軒で四言ずつ」歌ったことを覚えていた（「くどき」の一言とは七七の一句、「祭文松坂」は七五の一句）。現在の上越市に本拠をおく高田瞽女も同様に、「こうといな」「かわいがらんせ」など、門付け専用の唄の豊富なストックから適切な曲を選び、演奏した。

8. 「門付け唄」の見返りに、家人はたいてい瞽女に茶碗一杯分の米を心付けとして差し出した。米は重いので、瞽女は「銭の方がよい」と考えたようだが、俗信によれば不特定多数の人々から集めた米には霊力が宿るとされていたので、このいわゆる「瞽女の百人ごめ」と尊ばれた米は高い値段で買い取られた。この米を食べると頭がよくなる、風邪や病気の予防になるなどと信じられていた。

9. 地域によっては、越後瞽女は米以外にも種々の報酬を受け取った。越後の刈羽郡^{かりわ}を中心として活躍した明治19年(1886)生まれの瞽女の伊平タケは、次のように回想している。

10. (1)三島郡^{もめんわた}というのは木綿綿作っているどこがあって、畑からとってきたのを、門付け唄歌えばゴゼさんにくれるんです。それで「綿どこに行きます」というてもらいに行って、うんと綿もらってきては、ほかして自分で使うとか、もらったままで綿屋へ売るとか、そういうこともありました。

(2)それから「蒲原^おの麻どこへ行く」てて、長岡からじき近い見附(見附市)の方に行くと、麻糸を作っていて、くれるショ(人)がある。それは麻を採る時によるが。

(3)また「紙どこ」というのは、小国(刈羽郡小国町)の方で、紙をこしらえて干しておく時、門付けを歌うと、板から^へ剥いでくる。

(4)それから「鯖石(柏崎市鯖石川沿岸)の豆どこ」というてね。豆はいらんども、米の代わりに豆くれて、豆いっぱい溜まりますコテ、じっき。それをどっかへ買ってもらって……。何だたて、銭がいりますンダ。豆や米はいらねンダ。わたしが小せえのは、重荷をかついで、太らんなかったからね。豆もろうが、米もろうが、何もろたても、重たいもん担がんけばならん。切ねいが……。

(伊平タケ述『聞き書 越後の瞽女』)

11. 伊平タケは越後の蒲原郡^{かんばら}の「真綿どこ」にも足を延ばし、やはり真綿をもらった。群馬県を廻った際には、銭ばかりであったことを覚えていた。都会に近くなると貨幣経済が浸透していたことの現れである。

12. 門付け唄を歌いながら村々を廻った越後瞽女は、やがて「瞽女宿」と称された宿泊先に戻り、あらためて挨拶し、宿主にいわゆる「宿唄」を一つ、二つ聴かせた。めでたい「瞽女松坂」などを歌うのがよいとされ、人気の高い「新保^{しんぽ}広^{こう}大^{だい}寺^じ」や「くどき」の抜粋などで間に合わせることができた。この唄を独唱、あるいは瞽女一組全員が交互に一筋ずつ歌い、終わると急いで風呂を浴び、晴れ着に着替え、宿主が用意した質素な食事を済ませた。そして夜の席に臨んだ。

13. その間、村人が客間にぽつぽつと集まった。演奏がはじまり、若い瞽女が前座を歌い終わると、ようやく年長の瞽女が長編の「祭文松坂」または「くどき」の一段を誦し、聴衆の涙を誘った。村人が持参した少しばかりのおひねりは瞽女の報酬の盆に入った。

14. この曲の演奏が終わると、瞽女たちは無尽蔵のレパートリーから「おけさ」「松前」(越後追分)

「磯節」などの雑歌^{ざっか}を選び、聴衆の涙を笑いに変えた。聴き手に酒が入ると財布の紐が緩くなるため、瞽女は要望に応じて少しでも多く金を稼ごうとしたが、休みなく夜中過ぎまで歌わされることもあり、実入りはその分増えたものの、やはり瞽女稼業は辛いと演奏者はつくづく感じていたようである。翌朝には粗末な弁当をもらい、お礼のしるしとして祝唄などを歌唱し、次の村に急いだ。そして同じ日課がもう一度繰り返された。

P.2 ～ 6

[コメント]

越後の国で多くの方が活動をした瞽女^{こぜ}に関する最新の著作。日本の社会、文化・芸術を支えた瞽女の役割を理解する上での一級のテキスト。是非、御一読を。

— 2014 年 10 月 23 日 林 明夫記 —